

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

巻頭言

「ボランティア活動に参加して」

聖書宣教会校長

鞭木 由行

この度、震災にあわれた主にある兄弟姉妹の皆様にご心からお見舞い申し上げます。卒業生の奉仕する教会にも深刻な被害ができました。聖書宣教会も4月の教師会でこの震災に対する取り組みを検討し、ボランティア活動を連休明けの5月9日（月）から18日（水）まで行うことを決めました。短期間、限られた諸教会に支援をお願いしましたが、予想をはるかに超えた捧げものが備えられました。諸教会には改めて感謝いたします。

研修生約30名が三チームに分かれ、宮古方面、陸前高田方面、石巻方面に分かれて活動を展開しました。私が加わった石巻チームの最初の奉仕は、大津波に浸かった家の清掃でした。畳を上げ、床板をはずすと、床下には粘土状のヘドロがびっしりと詰まっています。厚さ約十センチのヘドロは黒光りし、独特のおいを発しています。それをスコップでかきだし、土嚢袋に詰め、外に運び出す。約十人が二日間働いてやっと一部屋分のヘドロを除去することができました。これが付近一帯の被災した一軒一軒の現実です。

すでに様々なテレビの映像で被災地の広大な被災状況を見ていましたが、同時に個々の家々が直面する具体的な被災状況に接することで、もう一つの現実を知らされました。またこのような中で、復興のために日々自分を犠牲にして生き生きと奉仕している宣教師や教会のリーダーたちの姿にも励まされました。私が奉仕した家の家主も、教会を通して紹介された教会員の実家です。そこで経験した多くの出会いに感謝しました。

ところで、このような震災の現実を前にして、私には、改めてルカの福音書13章の冒

頭のみことばが思い返されます。ピラトが、ガリラヤ人たちの血をガリラヤ人たちのささげるいけにえに混ぜた、という事件です。

主イエスはこの報告を受けたとき、何かコメントすることを期待されていたでしょう。このとき主イエスが語られた応答は、人々の予想をはるかに越えたものでした。さらに主は、御自分の主張を補強するためにシロアムの塔が倒壊し18人が犠牲となった事件にも言及してこのように回答しています。「シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの18人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

この指摘は、私たちがこの震災を考えると、一つの手掛かりとなります。主イエスは、一部の人々が他の人々より悪いとか、一部の人が責任を負うべきだという発想ではなく、私たち全てに対する悔い改めへの警告と理解しているのです。これは、確かに大きな警告です。それは単に道徳的な問題ではなく、私たちの生き方そのもの、社会のあり方そのものに関わることです。これまでのような繁栄の追求自体が変わらなければならないでしょう。そのような変革は果たして可能なのでしょうか。もし、それが可能であるとするなら、それは主イエスの十字架の福音しかないことを改めて教えられています。



.....救援奉仕活動に参加しての報告とあかし.....

救援奉仕活動実行委員長 加藤 秀典

震災から約二ヶ月が経つころ、私たちは被災地に立ちました。

震災直後、私自身は、被災者に接することへの戸惑いや放射能に対する不安、そんなことが脳裏をかすめ、その足をなかなか被災地に向けることが出来ずにいました。

そして「やっときた」被災地。そこで私たちは何ができたのか。それは被災地におけるただ一滴の水のようだったのかもしれないと思わされます。広大な瓦礫の世界で、一滴の水は何にも意味をなさないように思われました。被災された方々に私たちがしたことなど、一瞬ののどの渇きをも潤せない、せいぜいで舌先に感じるかすかな湿り気くらいではなかったか。しかし、「それでいいのだ」とある牧師より教えられました。「主は召してくださったクリスチャンのその一滴を無駄にはされず、ご自身の主権の中でやがて必ず実を結ばせてくださる。」

すべての結果を主におゆだねし、皆様のご支援に感謝しつつ、ここに報告させていただきます。

宮古方面チーム

リーダー 本科3年 矢吹 祈

世界一のスーパー堤防を擁し、津波対策に絶対の自信を持っていた「宮古市田老地区」。その地に立った私たちの目の前には、「世界一の堤防」を易々と越えた波のもたらした甚大な被害の跡が広がっていた。人間の無力さを心底思いつつ、活動を行った。

孤立した集落への物資配布、訪問を行った。迎えてくださる方々はとても温かく、喜んで迎えてくださった。教会の名による活動が既に一ヶ月半の間なされ、畑は耕され、種は蒔かれていた。そして、活動最終日に行われたコンサートには、考えられないほど多くの方々が集まった。福音宣教の継続の重要性と、東北の地で神様がなされようとしておられる御業の一端を垣間見た気がする。



訪問で話を聞かせていただき、宮古の方々の根が深い心の痛みも知った。

目撃者として、その痛みを癒すことができる唯一の主を宣べ伝える責任の重みを感じている。そして、この地の全ての人に福音を、と切に祈り求めている。

本科2年 姜 明善

韓国人の私は大きな地震と津波の被害を初めて目にしました。私は地震と津波の怖さを知りませんでしたし、ニュース報道を見ても良く理解が出来ませんでした。

今回の救援奉仕活動を通してその怖さを知り、言葉に出来ない悲しみを見ました。悲惨そのものでした。そこに住んでいる方々に外国人である私が、どのように慰めれば良いのか。それが悩みと

なりました。しかし、そこには沢山の勇気、希望、協力、交わりがありました。力を合わせて互いに支え合う。これは奉仕者だけではありませんでした。被災されている方々が自ら隣人のために自分を犠牲にする。

けれども、一つ残念な事はその方々がまだ、真の神様を知らない事でした。互いに助け合い、慰め合うけれども本当の慰めには辿りついて



いませんでした。そこで見た、片付けも終わっていない家に飾ってある真新しい神棚が思い出されます。それが聖書に代わるその日まで祈り続けたいと思います。

陸前高田方面チーム

リーダー 本科4年 伊東 勝哉

堤防から眺める海はとても穏やかでした。

一方、背後には見たこともないほどに傷ついた景色が広がっていました。このコントラストがことばを失わせました。そこにどのような時間が流れてきたのでしょうか。どれだけの人が涙を流してきたのでしょうか。その土地に初めて来た私たちの心をそのような複雑なものにするのであれば、その土地を愛し、愛する人々を失った方々にとってどれほどの痛みでしょうか。

あるご家庭に伺い、泥まみれになった食器を洗い、棚に戻す作業をしました。初めは泥の塊にしが見えなかったものも、家人にとって、一つひとつに思い出や愛する人との時間が詰まっていることを教えられました。棚に戻った食器を眺めるご主人の笑顔が輝いていました。今回の活動の中で、私達は主の語りかけを聞きたいと願ひ求めてきました。



これからも求め続ける姿勢が私達には必要だと思われています。

皆様の尊いお祈りに心から感謝します。

本科3年 石井 陵太

今回の奉仕支援活動で最も印象に残っているのは、避難所で見たく多くの笑顔です。主が与えてくださったその喜ばしい一瞬を、私は心から感謝しています。



避難所や仮設住宅の方々のために、私たちは様々な支援物資を準備しました。アクリルたわし作成セットをチーム全員で作し、絵本もいくつか用意しました。また、サマリタンズパースの物資を受け取るために、活動日の一日を使って仙台にも行きました。しかし、それらはすべて、具体的な配布先も配布方法も未定の状態での準備でした。

そのような中であって、活動期間中に多くの出会いが与えられ、その出会いを通して、避難所や仮設住宅へ支援物資をお届けする道が開かれました。配布当日、行く先々で、喜んでくださるお一人お一人に出会えたことは、私にとって本当に嬉しいことでした。

その方々が、今どのような顔をされているかが気になります。私の東北奉仕支援活動は、まだ終わっていないようです。

石巻方面チーム

リーダー 本科2年 大高 伊作

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから」マタイ5:3

石巻方面のリーダーに選ばれ、準備を含めて1カ月間活動してきた。その間、自分の無力さを痛感した。

そんな時、出発前日の礼拝で上記のみことばが与えられた。何も無い者が全てを主に明け渡す時、主が働いてくださる。分かっていたはずのことが

分かっていた。現地での活動中もこのみことばを心に留めていた。大変な事もあったが、主が私の欠けを綺麗に埋めてくださった。助け手が与えられ、予定していた事が、それ以上の形で出来上っていく。それを目の当たりにしたとき、胸が一杯になり、涙をこらえるのがやっとだった。主は素晴らしい！心からそう思えた。



震災復興には時間がかかる。このような時にこそ福音が必要だ。町の復興と同時に、心の復興がされなければいけない。その一端を今後も担わせて頂きたいと思われた。

最後に、皆様のお祈りと御支援に心から感謝致します。

本科4年 児玉 武志

お祈りと支えを感謝致します。私たちのチームは、2つに分かれて三日間、2チーム合わせて3軒のお家に行かせていただき、ご家族の方々と共に作業し、交わりをいただくことができました。



私たちは、その交わりの中で、東日本大震災によって、一つ一つのご家族が経験した痛みを覚えました。3月11日以降に経験した

こと、困難な避難所生活、失った仕事などの話を聞いたこと、また土足で家に上がり、家の物を壊し、捨てなければならない現実に直面した時に、ご家族が経験している痛みがどれほどのものかを思わずにはいられませんでした。



そのような中でも、感謝なことは一つ一つの家族と集中的に交わりを持つことができたこと、「このご家族のために」という思いの中で奉仕させていただけたことでした。そして、そのような思いを持って奉仕している教会、先生と出会えたことでした。被災地での生活が守られるように、続けて祈らせていただきます。

***** 2011 年度 新入会生 *****



後列左より：齋藤、東海林、輪田、舛田、高田、馬場
前列左より：櫻井、仲田

氏 名	出身教会	奉仕教会
(聖書神学舎本科) [6名]		
齋藤 満	浦安聖約キリスト教会 日本聖約キリスト教団	北総大地キリスト教会
東海林 隆之	川越聖書教会 日本福音キリスト教会連合	川越聖書教会
高田 照一	香椎バプテスト教会 単 立	東京聖書教会
仲田 志保	パリ・プロテスタント日本語キリスト教会、仙台福音自由教会	流山福音自由教会
舛田 友太郎	芥見キリスト教会 同盟福音基督教教会	深谷福音自由教会
輪田 豊	高石聖書教会 福音交友会	キリスト教朝顔教会
(聖書神学舎聖書科) [2名]		
[聖書専攻]		
馬場 義実	下北沢聖書教会 日本同盟基督教団	下北沢聖書教会
[教会音楽専攻]		
櫻井 めぐみ	郡山キリスト共同教会 日本イエス・キリスト教団	荻窪栄光教会

主のみことばを伝える者として

齋藤 満

私は聖書宣教会に入会できたことを主のみことばと信じます。十年前、私は神を信じ、イエス・キリストを自分の主として受け入れました。その時以来、私は残りの人生を全て主のものとして献げています。

大学卒業後、日本国際飢餓対策機構を通してカンボジアに派遣され、二年間農村開発に携わりました。そこで学ばされたのは、人間のあらゆる問題の陰には人間の罪の問題があるということです。貧困の真の原因は、資源の不足や必要な知識の欠如にあるのではなく、究極的には人間の罪にある。そのことを確信させられた時、私は福音の必要を感じました。人間に人の心は変えられません。しかし、神のみことばにはそれができると私は信じています。

私は聖書宣教会で神のみことばをしっかりと学び蓄え、福音を直接伝える者として、世に出て行きたいと願っています。

主を賛美するために

櫻井 めぐみ

もう 10 年以上前のことになりますが、聖書宣教会の教会音楽講習会に参加したことがありました。故岳藤豪希先生の講義は非常に難しく、当時の私にとっては全く理解不能でした。しかし、みことばと音楽の関わりについてははっきりと教えられ、私自身が真剣に神さまとみことばに向き合い、心から主を賛美する者となるように示されました。

それから長い時が経ちました。その間、いろいろと悩み苦しむ中で、神さまに完全に背を向けて歩んでいた時期もありました。しかし主は長い年月をかけて悔い改めの心を与えてくださいました。こうして、私は音楽によって主にお仕えしたいと、改めて決心するに至ったのです。

主を正しく賛美することは、御霊と恵みによって与えられた、私の大きな願いです。

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。」(ピリピ人への手紙 2 章 13 節)



後列左より：老松、松田、李、森下
前列左より：和田、若林

氏 名	奉 仕 先
(聖書神学舎本科卒業) [4名]	
李 賢 娥	平和台恵教会 日本同盟基督教団
森 下 信 義	天白キリスト教会 同盟福音基督教会
松 田 聖 一	太平チャペルキリスト教会 福音バプテスト宣教団
老 松 望	キリスト者学生会関西地区
(聖書神学舎聖書科修了) [2名]	
若 林 正 一	上田福音自由教会 日本福音自由教会協議会
和 田 孝 之	岸和田聖書教会 福音交友会

「私は霧 ことばは岩」

老 松 望

卒業を間近に控えて、自分のなすべきことは一体何なのだろうかと思い巡らすことがしばしばあります。神様は、私を通してどんなことをなさそうとしておられるのか。私の果たすべき責任は何なのか。それを、どのように全うしていけば良いのか。今、どんな備えをしておく必要があるのか。祈りつつ、考え、そして、その中で気づかされたことを、心に留め、時にはメモをとります。

しかし、そんな時、いつも思い出される御言葉

があります。それは、ヤコブの手紙4章14節です。

私は一体何者か？私はしばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎない。神の前に思慮深く、知恵を尽くして歩んでいかなければいけないが、自分の計画通りにいくかのような考え違いをしてはならない。そのことを決して、忘れてはいけなと思わされます。自分や、自分の考えではなく、神と神のことばに信頼しつつ、歩いていく者でありたいと思います。神はとこしえの神であり、神のことばは、不動のものなのですから。

「砕かれた原点から」

松 田 聖 一

私は、大きく砕かれた所から、献身者としての歩みが始まったように思う。今や、知っている研修生の方が少ないが、私は入会試験を二年連続で受けた。つまり一度入会に失敗したのだ。このことは、私自身を見つめる大きなきっかけとなった。召しの理解や、祈りの足りなさ、主のみこころを十分知ろうとしてなかった姿勢の甘さなど、全てにおいて、自分の至らなさが浮き彫りになった。だが、それが原点だった。

翌年、入会が許されてもなお、味わうのは、自分のかたくなさや愛の無さ、不忠実さや心の貧しさだった。だが、それでも変わらず示されたのは、みことばを通して示される、変わらぬ主の愛とあわれみだった。そして、確信した、揺るぎない主からの召しだった。

今後、気付けば自分の原点を忘れるような状況があるかもしれない。だが、その砕かれた原点と主の恵みとあわれみを忘れることなく歩み続けた。ここまで導いてくださった主に、心からの感謝を覚えて。

「従順と誠実」

李 賢 娥

私は韓国のある賛美宣教団の働きで初めて来日し、それから日本宣教に重荷をもつようになりました。そして、さらに聖書を学び、再び宣教の働きを担いたいと願い、聖書宣教会に導かれました。

宣教会での生活は初めて経験することが多く、戸惑いと共に主に委ねることを学ぶ日々でありました。そのような私を、先生方や職員の方々、研修生たち、教会の方々には忍耐をもってかかわって

くださいました。心から感謝しています。

原語で聖書を学ぶことはとても恵まれたときでしたが、難しくため息をつくことも多くありましたが、聖書そのものから忠実に聞こうとするところに主のあわれみがあり、みこころの深さと確かさを教えられたと思います。そして、教えられたことを寮生活や教会奉仕を通して実践することで信仰者のあり方を問われました。

これから現場に遣わされていきますが、自分自身による何かでなく、主のみわざを期待し、従順で誠実でありたいと願います。

「四年間を振り返って」

森 下 信 義

恐れ多くも信仰の父祖アブラハムの歩みを重ねながら、自らの歩みを振り返ることがあります。

「信仰によって、アブラハムは、…どこに行くのかを知らないで、出て行きました。」(ヘブル人への手紙 11 章 8 節)

私の歩みもまさに、どこに行くのかを知らぬまま、ただみことばを学びたいという一心で飛び込んだのが聖書宣教会という「荒野」? でした。その歩みは「信仰によって」であったか、反省をさ

せられます。しかし、あわれみ深い主は、私を、そればかりでなく私の家族を増し加えた上で、ここまで導いてくださったのです。主はこの4年間、荒野に十分な糧を用意してくださいました。それは、尊い教会の祈りによるとりなしと励ましであり、愛する信仰の友でありました。そして、何よりも学びによって与えられた、主ご自身とみことばへの信頼です。主権をもって導いて下さる主を恐れます。

「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださいましたことを何一つ忘れるな。」(詩篇 103 篇 2 節)

「真理のみことばをまっすぐ説き明かす」

若 林 正 一

銀行を定年退職し、60 歳から 3 年間学ばせて頂きました。家庭集会から教会へと 18 年間奉仕させて頂いた教会が、母教会から自立でき、同時に牧会歴 30 余年のベテランの牧師先生が与えられ、最も相応しい時にかねてより希望していた学びの道を神さまは開いてくださいました。聖書科修了後はインターンの期間を経て、上記の上田福音自由教会で副牧師として奉仕致します。

神学校で学ぶ思いが与えられ、聖書宣教会を選んだ時、テモテへの手紙 第二 2 章 15 節「真理のみことばをまっすぐ説き明かす、恥じることの無い働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい」のみことばが与えられました。宣教会での学びは、このみことば通り、聖書解釈における原語の優位性を心に刻んだ 3 年間であったと思います。

あと何年、主がご奉仕をお許しく下さるか解りませんが、祈りつつ従ってまいりたいと思います。

「みことばのとおりに」

和 田 孝 之

「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸へ渡ろう』と言われた。」(マルコの福音書 4 章 35 節)

このみことばによって、私は、人生の夕方である 50 歳にして主の召しに応答し聖書宣教会での学びの舟に乗りました。

その 3 年間の舟旅は、みことばどおり突風があり、主への不信仰があり、自分の弱さ、足りなさ

を知らされました。また、それと共に主の約束は完璧で無事に向こう岸に着かせてくれました。

主は、私が学びの厳しさに音をあげる時、みことばをもって励まし、また不思議に多くの助け手を送って守り支えてくださいました。

神のみことばの確かさをこの 3 年間でも体験できました。こんな者をここまで導いてくださった主にただ感謝あるのみです。

これからも、この真実な主により頼んで歩みたいと願っています。

<夏期研修講座中止のお知らせ>

ウェブサイトではお知らせしていますが、今年度の「夏期研修講座」は中止とさせていただきます。すでにテーマを決め、諸教会にも案内を送付した後ですが、大震災でこの計画を変更せざるを得ないと判断いたしました。

5月の授業日を調整して被災地への救援奉仕活動を計画したこと、開催場所として予定した奥多摩福音の家の状況、さらに電力供給の問題がどのような影響を与えるのか未知数であったこと等を勘案して、今年の開催は、断念することが良いと判断いたしました。急な中止をご理解いただけますように、お願いいたします。

なお、「教会音楽夏期講習会」(2011年7月28日から30日)は開催します。

<図書館便り>

図書館長 津村俊夫

最近、しばしば耳にすることばに「クラウド型コンピューティング」というものがあります。自分の持っているコンピュータではなく、第三者に自分のデータの管理をまかせて、自分は必要な時にそこにアクセスして用いるという方法です。インターネット接続環境があればいつでもどこでも必要な情報をとり出せるということです。図書館情報という点から考えますと、そこに居ないで図書館の本を自由に読むことが出来たらなんとすばらしいことでしょうか。

確かに、電子化された辞書は大へん有益です。かつては、旧約の専門家になるためには「腕力」が要ると言われました。ヘブル語テキストである BHS は大型版しかありませんでしたし、ヘブル語辞書 BDB の Oxford 版は分厚く、その二冊だけで大型のカバンがいっぱいになったのですから。その点から考えますと、今、この二冊だけでなく、数百冊の本を「クラウド」から取り出したり、電子化して簡単に持ち運べることは有難いことです。

電子化されたデータのメリットは何と言っても即座にその検索が可能であることです。かつては、何時間、何週間もかかって行った仕事が一瞬のうちに行われるのです。しかし、そのデメリットは、こちらの願う条件に合致していることにはすぐに到達しますが、そこに到る迄の途中の「景色」が見えないということです。ある先輩の学者は、1000 頁以上ある BDB を最初から最後まで丁寧に読むことによって多くのことを学んだと言っていました。一枚一枚、指で頁をめくりながら思考を整え、次に考えるべきことを予測していくという知的営みの大切さは、電子化の時代にあっても変わらないのではないかと思います。

《祈りの課題》

- | | |
|---|---|
| ○被災地と主の教会を覚えて。復興の歩みの中で神を愛し、隣人を愛する主の民の歩みが強められ、祝されるように。 | ○年度初めの不規則な日程が一段落して、学びと訓練の日常を重ねている研修生のために、特に一年生のために。 |
| ○今春の卒業生をはじめ、日本と世界の各地で主に仕えている伝道者たちの守りと奉仕の祝福を。 | ○教職員一同が主の目にかなう真実な奉仕者として歩めるように。主のねぎらいと祝福を。 |

編集後記

主と主の教会に心から感謝して 2010 年度の決算報告を同封いたします。養ってくださる主をほめたたえ、主にある皆様のお祈りとお支えに感謝を申し上げます。

詩篇のみことばを思い巡らしています。「民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御

前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。(62:8) どこにあっても、何についても、この臨在信仰に生きられますように。待ち望む者を、豊かな恵みをもってあしらってください。主をほめたたえます。(A)